

秋和地区 蚕室造りの家の変遷(1)

R.5.10.1

秋和地区は、秋和村時代から蚕種製造の先進地上塩尻村の隣村として古くから養蚕・蚕種製造が盛んに行われていました。明治22年秋和、上塩尻、下塩尻村が合併して塩尻村となり、上塩尻が身内地域となって、ますます養蚕・蚕種製造業が盛んになりました。

蚕糸業は、養蚕と製糸の両輪が関連し助け合うことで、飛躍的に発展していきませんが、明治22年に丸子に依田社、33年に上田の笠原製糸、大正7年に信濃絹糸が創設されて大量の生糸が生産され、養蚕も最盛期を迎えました。

秋和地区も、明治後半から大正、昭和の初め頃まで蚕種製造、養蚕が大変盛んで蚕室造りの家が後から後から造られました。北国街道添いに大きな蚕室造りの家が建ち並ぶなど盛況を極め、懐かしい秋和の景観を造ってきました。

戦前は、どこの家でも寝る場所もないほど蚕を飼って繭を出荷してきており、農村経済の大きな柱でした。しかし昭和4年の世界大恐慌以来の繭値の相次ぐ暴落は農村経済を直撃し、高値のとき1割近くまで落ち込むなど、深刻な農村不況を招きました。唯一の現金収入として、蚕にすぎりつくしかなかった農村の厳しさは、いま痛く思いやられ、戦争の足跡が近づくなかで苦しさに耐えながら生き抜いてきた先人たちの労苦の跡が思いやられます。さらに太平洋戦争末期ごろから、ナイロン、ポリエステルなどの合成樹脂の繊維製品の登場により農村経済の中心であった養蚕も終末を迎えることとなります。

その苦闘の歴史を伝える生き証人もいふべき蚕室造りの家は、いずれも築100年を超え、現在住居に使用してない場合は、極端に老朽化が進み、物置というより廃墟化が進み、大きい蚕室は負の遺産にもなりかねないのが現実で、その保存維持はきわめて厳しいものがあります。

1. 最近、姿を消した主な蚕室造りの建物を挙げて見ると...



北国街道入口の工藤家1 街道側より



北国街道入口の工藤家 2 街道側より



北国街道入口の工藤家 3 街道側より



滝澤秋暁生家の門・母屋・桑置場 839



滝澤秋暁生家の蚕室（両水館）



工藤家の母屋兼蚕室 駐車場側より 637



小林家の母屋兼蚕室 669



小林家の蚕室 661



郷蔵小路の景観 自治会館側より (小林家の物置群 804)



佐藤家の母屋兼蚕室 917



佐藤家の母屋兼蚕室 北側より 917



中沢家の蚕室 南側より 725



中島家の蚕室 755



中島家の蚕室 736



中沢家の蚕室 1035

最近、姿を消した主な蚕室造りの建物一覧表 R5.9.20 現在



北国街道秋和入口の景観



秋和入口の工藤家の家並み



国道側から工藤家の蚕室



663 番地 小林家の母屋兼蚕室



561 番地 小林家の蚕室



637 番地 工藤家の母屋兼蚕室



郷蔵小路の景観
〃 裏側から見ると



917 番地 佐藤家の母屋兼蚕室



755 番地 中島家の蚕室



725 番地 中沢家の蚕室
730 番地 工藤家の蚕室と物置



752 番地 花村家の母屋兼蚕室
1035 番地 中沢家の蚕室



736 番地 中島家の蚕室



